

## 令和6年度第2回埼玉県青少年健全育成審議会 議事録要旨

日 時	令和6年9月11日(水) 14時00分から15時45分
場 所	知事公館大会議室
出席者数	13名
出席委員	堀田会長、阿久戸委員、会沢委員、阿左美委員、青砥委員 新井委員、栗原委員、高沢委員、矢作委員、山崎委員 小林委員、増田委員、渡邊委員
欠席委員	森田委員
議事	(1) 令和6年度埼玉県推奨図書について(諮問) (2) 埼玉県こども計画(仮称)について

## 1 開 会

## 2 議事録署名委員の指名

同規則第10条第2項により、青砥委員、矢作委員を指名した。

## 3 議事要旨

### 議事(1) 令和6年度埼玉県推奨図書について(諮問)

事務局から資料1-1から資料1-5により説明し、委員から次のとおり質疑等があった。

(堀田会長)

ただいまの伊藤会長のご説明、及び事務局からの説明で御意見や御質問はあるか。

(山崎委員)

今年も非常に面白い本を御紹介いただいた。昨年、一昨年もいろいろな本を見せていただき、大変興味深かったが、特に今年度はバランスが良い印象を受けた。文字が多いものや写真があるもの、物語もあれば実用書に近いものなど。また、主人公がゲーム好きという設定から始まって、いろいろなことに興味を持っていくという内容の本など、今の子供たちにも入りやすいような感じのする本が多く出ていて面白いと思った。

不読率と図書のことと、2点伺いたいことがある。その前にまず確認であるが、資料にある図書の選定理由は、子供や一般の人も見るのか。

(事務局)

選定理由は、選定委員会の先生方の御意見を踏まえて記載している。特に県民の皆様公表することまでは考えていない。一般の方向けには、本の内容や、読んだ子供たちの感想などを紹介している。

(山崎委員)

それであれば大丈夫かもしれないが、小学校高学年の3番目、「すき、好き、スキ」の選定理由にある「LGBTQは今や身近な問題である」の「問題」という表現は、当事者からすると非常に難しい気持ちになってしまうかもしれないと感じた。

続けて不読率について伺いたい。今まであまり意識していなかったが、県が不読率の低減という目標を立てて取り組んでいるということが分かった。度々お話しているが、普段子供たちと接していて、本をよく読む子と全く読まない子と二極化していると感じる。月に一冊も読まない子が減るとすれば、このような良い書籍を紹介するというのもあるが、学校の活動の中で朝読書の時間のように本に触れる時間があるということが、必要なのではないか。不読率自体も下げられるし、若干強制

力がある形ではあるがそのような機会でも本に触れてみると、意外と本も面白いと感じて、本を借りたり買ったりすることもあると思う。そういった活動を取り入れている学校もあると思うが、そのような不読率が下がる取組を伺いたい。

また、最初にこの推奨図書を通じて不読率を下げていくというお話があった。これは込み入った質問かもしれないが、この本を借りた子供たちがどれくらいいるのか。子供たちが本を手取るきっかけとなった、というのが見えるものは何かないか。やはり、大人が選んだ本と子供が手取る本というのは違う場合もあると思う。私としては、子供が読みたい本がどういう本なのか、子供の意見を聴く機会が必要かと思う。

今回に関して子供の意見がどのように取り入れられたのか、また子供の意見を取り入れていくことについてどうお考えなのかを伺いたい。

(堀田会長)

不読率を下げるための取組、朝読書やその他の工夫をどのようにしているのか、というのが1つ目の御質問であった。これは伊藤会長に伺ってもよいか。

(伊藤優良図書選定委員会会長)

正直に申し上げますと、朝読書の取組は若干少なくなってきているのが現状である。しかし、今でも、朝落ち着いた時間の中で本を読む、ということを尊重している学校もあると聞いている。

不読率を減らすということでは、どこの学校でも学校図書館の図書主任の先生を中心に読書まつり等を行っている。1学期は子ども読書の日を中心とした4、5月に、秋は読書週間の前後に行うことが多い。

本校では、低学年・中学年・高学年でそれぞれ目標ページに達したときに、学校のキャラクター「めくりん」から名前を取った「めくりん賞」という形で、読書を率先して行った児童に対して賞状を出している。このように、いろいろな学校で、少しでも子供たちが本に取り組めるような時間を取っている。また、隙間時間に本が読めるように、机の中や机の脇に常時本を置いておく、というような活動を継続しているところもある。

お答えになるかわからないが、学校としては、どこの学校も、子供たちにできるだけ本に親しめるような活動をしている。加えて、読み聞かせボランティアの方などに学校に入らせていただいている小学校も多いのではないかと思う。中学校でも、以前よりも積極的に活動されている学校が多いように話を聞いている。

(堀田会長)

詳しく御説明いただいた。

もう1つの質問は、推奨図書をどのくらい子供たちが手に取ったかわかるか、という話だった。

(事務局)

実際に推奨図書を読んだ子供の数そのものは把握できていないが、学校や図書館の配架率を見ると、高校では66%以上、中学校でも44%以上となっており、昨年度と比べて上昇している。

また、一例にはなるが、図書館で推奨図書決定後に大きく広報していただいたところ、貸し出しの回転率が大きく増え、それまで1回しかなかったのが28回に増えたという報告があった。「推奨図書」というようなお知らせの仕方をするすることで、読む子供の数は増えていると思う。

(堀田会長)

何かコメントはあるか。

(山崎委員)

全部の学校を調べろという意味ではないが、学校単位でも、図書室でその本がどのくらい借りられているかどうかがある程度見えるといいと思った。

今お話があったように、推奨図書だけで不読率を下げるのではないと思うが、今まで我々が選んでいる本が、子供たちが手に取ってくれる本になっているのかどうかというのは気になっている。子供がどういうものを見たいか、というところに繋がってくるので、どのくらい借りられたかというよりは、この本を選ぶときに子供の意見がどのくらい反映されているか、ということが気になる。

(堀田会長)

子供の意見を反映するために、どういう工夫をしていけるか、というような御意見だったかと思う。今後、取組として考えていっていただきたい。

その他に何かあるか。

(渡邊委員)

朝読書など、不読率を下げる取組の話聞いていて思い出したことがある。

私が関わっている子供たちの中に、通学があるタイプの通信制高校に通っていて、書いたり読んだりするのが苦手な特性を持っている子がいる。その子に対して、学校の先生が、青空文庫という著作権が切れた作品を公開しているウェブサイトに掲載されている作品の一覧を出してくれていた。その表には読みやすさが星の数で3段階くらい示されていて、作品を読んだら、どういう登場人物がいて、どんなことをしていた、というようなことを簡単に書く。すると、シールではないがマークが増えていき、読んだ量と感想が溜まっていったというのがわかる。

それをやっていると見せてくれた子が、古典も意外と面白い、マークもどんどん溜めていきたいと言っていた。書く量も読書感想文ほど多くなく、かと言ってただ

読んだだけでもなく、なんとなく内容も記憶に残るような形になっていて、いいやり方だと思った。

(堀田会長)

読書感想文は大変だが、もっと気軽に読んだことがフィードバックできるようなやり方ということで御紹介いただいた。各学校等でもぜひ参考にさせていただきたい。他には何かあるか。

(青砥委員)

意見ではなく感想であるが、今年度の推奨図書を拝見して、本当に素晴らしいものがたくさんあっていいなと思った。

私たちは埼玉県内で、困窮層の子供たちや、なかなか家庭や学校で居場所がない、孤立した子供たちの支援をしている。不読率の話があったが、しんどい家庭の子供たちは、こういった本を手取るのがなかなか難しい環境にあると思っており、私たち民間の団体でも何とかしてこの子供たちに、本を手を取ったり、読み聞かせの経験を届けたいと考えている。

実は昨年度、私がここで拝見したこの推奨図書を、私たちの団体で助成金を得て、少しまとめて購入させていただき、私たちの居場所で子供たちにできるだけ届ける取組を行った。民間の力はわずかではあるが、今年度も素晴らしい本がそろっているので、できるだけ子供たちに読んでいただけるような取組を継続していきたいと思っている。

(堀田会長)

貴重な取組のお話をお聞かせいただいた。本当にありがたいことだと思う。

(栗原委員)

私も感想であるが、不読率に対し、本を読まない時間がインターネットやゲームをする時間に繋がっているということがあると思う。

読み・書き・そろばんが基本というのはいつの時代も変わらないと思うが、今の子供たちは目からの情報、耳からの情報が多く、それらを頭の中で整理して理解していく力が弱くなっていると感じる。例えば、きれいな字を書くのが面倒くさいと言ったり、漢字が書けなくなっているという事実がある。書き間違いを目にすることも多い。本を読むというのは、心の栄養、頭の栄養だけではなく、本当に基礎のことだと感じる。そして、それが勉強ではなく楽しみの1つとして子供の成長に寄りそっていくと思うので、御両親も含めて何を読ませていいかわからないときにこのような指針があると、とても手軽だと思う。

また、これが近くの図書館や、学校の中の図書館に取り揃えてあることもとても大切なことだと思う。今回も良書ばかりだと思うが、価格を見るとやはり絵本でも、

価格がこんなにするんだという感想もある。一冊一冊手に取ってみると、芸術品のような域に達する絵本も多く、また大判であったり、印刷も綺麗なので、価格的には納得しているが、これを気軽に読めるという環境も大切だと感じた。

(堀田会長)

貴重な御意見を頂いた。価格のこともあるので、身近なところで読めるといい、というのは本当に思っている。

たくさんの御意見を頂き感謝する。年々審査しなくてはいけない図書が増えており、審査の方には大変な御尽力をいただいているのではないかと思う。

今回諮問を受けた図書について、全て推奨すべきものとして知事に答申することとしてよろしいか。

(異議なし)

(堀田会長)

それでは、異議なしとのことで、知事に答申することとする。なお、知事への答申については、後ほど事務局を通じて提出することとさせていただく。

## 議事(2) 埼玉県こども計画(仮称)について

事務局から資料2-1から資料2-3により説明し、委員から次のとおり質疑等があった。

(堀田会長)

ただいま事務局から埼玉県こども計画(仮称)について説明があった。内容について、御意見や御質問はあるか。

(渡邊委員)

この8月31日の意見交換会に出させていただいた。児童養護施設出身の子や、今困難を抱えている当事者の若者と話したが、同じ若者とは言っても話す内容は様々で、お互い全然知らなかったことばかりだった。

特に印象に残っているのは、助けてくれる相談の窓口が実際にあっても、髪を染めていたりすると「あなた困ってないでしょ」と見られてしまう、ということ。外見で判断されたり、助けを求めても助けてもらいづらいというような意見があり、困難を抱えているからこそ、その子自身の問題が起きてしまう、居場所にも問題を起こしてしまう子も多いのだろうなと思った。そして、それをひっくるめて全部受容してくれるような場所が必要だと思った。

(堀田会長)

当日御参加いただいたということで、当日の様子などお伝えしていただいた。今のことにする御意見や御感想で、その他にも何かあるか。

(増田委員)

私も8月31日に参加させていただいた。今渡邊委員からもあったが、全てをひっくるめて受け入れてくれる大人に、学校に行っている中ではなかなか出会えない。学校にいるカウンセラーさんを否定するわけではなく、いいカウンセラーさんに出会えば、すごくうまくいく場合があるけれども、それは学校ごとに違ったりする。

それでは、どういうところにそういう大人がいるのかと考えていくと、地域のこういう居場所がすごく増えてきていて、いろいろな取組をしている中で、その地域に居場所が見つけれられて、心が上向いていく、というところにあるのではないかと。

前日も少しお話したと思うが、放課後居場所カフェのようなものを地域でやっても、まだまだそこが学校に入っていくというところは少しハードルが高い。先ほどの子供が求めている本とは何だろうというのと同じだと思うが、子供を真ん中に考えていくと、ニーズは実はそこにあるのではないかと。子供たちが求めているのも安心して過ごせるところが地域にあって、そこが学校に入っていると、ちょっと学校行ってみようかなと思えることもある。それが、これから求められていくのではないかと、という話もあった。

実際に当事者の声として聞いたのは、相談はしたけれども、返ってくる言葉がかみ合わないということがあって、そこでもう中学校に行くのが嫌になってしまった、という話だった。少し前の時代だと、カウンセラーさんとは違う名物先生みたいな変わった先生がいて、カウンセラー的役割を果たしていたということがあったと思う。しかし今はなかなかそういう機会がなくなってきたので、その辺りの仕組みを時代に合わせて変えていくことが必要なのではないかと思った。

(堀田会長)

学校の中では、全部ひっくるめて受け入れるというようなことがなかなかできづらくはなっている。話を伺いながら、どうしたらそういう存在につなげていけるのかと思った。

他に御意見等はあるか。

(山崎委員)

私は普段スクールカウンセラーをしている。いいカウンセラーに私はなれているのか、少し疑問を抱きながら二人の話を伺った。

こども計画の将来像が1～3まである。順番が関係あるのかはわからないが、私の印象として、一番最初に「子供の意見が尊重される」ということが来ているのが素晴らしいと思った。やはりここを掛け違えると、大人が子供のためを思ってやったとしてもずれていく。これは、子供に限らず支援をする側とされる側の話として

あると思う。

実際、すでにこのディスカッションや訪問して子供たちの意見を聞いたということだが、当事者・子供の生の声は影響力があるので、非常にそうだなと思う部分と、それ以上の突き刺さる部分があった。先ほど事務局から、また別の機会も作っていくとあったが、意見を聴くことが土台になると思う。その上で、それをどう実現できるか、ということから始まる話ということかと思った。

普段はスクールカウンセラーをしており、立ち位置は難しいところもあるが、やはりどうしても学校という場にいると、学校という枠の方に子供を収めようとしてしまう部分がある。子供もおそらくそう思ってくるのもあると思うので、なかなかすべて学校でカバーできる問題ではないと思う。

ただ、学校の中でも、まだ明確ではないが、子供の意見を聞くということで、先生方も少しずつ変わってきているような気がする。どうしても変化するには時間がかかるし、学校ではできないものもあると思うが、一番身近に、地域にあって子供が在籍している学校が、そういう場になると良いと思う。

先ほど渡邊委員と増田委員のお話があったが、学校外の施設・機関などが一緒になってやるのが大事だと思う。そして、子供がどこで本音や気持ちを言うか、子供自身がそれを選べるのが大事だと思う。どこも受け皿としては作るが、その人・その場所によって子供が話す内容が変わるということが現実にはあると思うので、情報共有しながら、子供をカバーするネットワークを広げていくのが大事なのではないかと思った。

(堀田会長)

この審議会でも何度も出てきていると思うが、学校と地域のネットワークをもっと作り、お互いに入れ子のように入りあう、というようなことが実現していくといいと思っている。

最初の将来像Ⅰの中に「こどもの権利擁護・意見の反映」という柱を立てていただいており、その(2)に「こども等が意見を表明する機会の確保」をまとめてくださるということなので、どのようにこれが実現していくのか見守っていきたい。

他にはあるか。

(渡邊委員)

また先日の8月31日の話になるが、お聞きしたかったことがある。

今回、ファシリテーターにこども哲学・おとな哲学アーダコーダさんが入ってくれました。話す人がぬいぐるみを持って、持っていない人は話を聞きましょう、ただ言って終わりではなくお互い会話しましょう、という哲学対話の形式で意見交換を行った。名前も、本名ではなく全く違う名前で参加でき、普段の自分の身分など関係なく本音で話していいという雰囲気を作ってくれました。

私も、普段哲学対話に参加したり、子供たちとやってみたりしている。何故、今



回アーダコーダさんをファシリテーターにしようと思ったのか、理由を知りたい。

(青少年課長)

お話にあったように、今回、こども・若者の意見を聞くにあたって、自分の気持ち素直に出せるような雰囲気づくりを特に重視した。

国も含めて子供たちの意見反映に積極的に取り組んでいるところであるが、そこで、いくつかの NPO の取組を紹介していただいた。その中に、今回ファシリテーターとして御協力をいただいたアーダコーダさんがいて、その手法のひとつとして渡邊委員のお話にあったようなことをされていた。やはり、「この場限りの話ですよ」とか、「自分の思っていることを素直に話せばいいですよ」という雰囲気にするのが一番大事だと考える。それがどれだけできたかわからないが、少しでもそういったことを意識するようにした。

今回のディスカッションの冒頭でも、資料をみんなで確認していただいたり、事前に読み込んでいただいたりすることで、雰囲気づくりに取り組んだ。このようなことは、引き続き取り組むべきと考えている。

(堀田会長)

ファシリテーターがどのように進めるのか、というのはその場に大きく影響すると思う。今後もそのようなことを大切にしていきたい。

こども計画については、今後どのように進んでいくのか。申し訳ないが、もう一度確認させていただきたい。

(青少年課長)

今回、こども計画を作るにあたって御意見をいただいたため、それを庁内で共有し、計画の中に反映させていこうと思っている。その後、県政サポーター制度などの別の手法を使って、もっと大々的に広く意見を聞いたり、こども計画の県の案がまとまったら県民コメントという形で意見を頂いたりする。そういったプロセスを経て、また審議会にお諮りし、最終的には、議会に提出し、議案として審議していただく形になる。

(堀田会長)

この審議会では、いつ頃次のこども計画の具体的な案が上がってくるのか。

(青少年課長)

予定では、この後2回話をさせていただこうと思っている。11月くらいと、2月前くらいと考えている。

その中で、今日の段階ではまだ方向性しか出ていないが、具体的な案文についても御報告させていただきたいと思っている。

(堀田会長)

11月くらいにもう少し具体的なものが出てくるということなので、引き続き御協力をお願いしたい。

議事終了